

## 産婦人科領域における T-3262 の臨床的検討

伊藤 邦彦・和泉 孝治・高木 博・玉舎 輝彦

岐阜大学医学部産科婦人科学教室\*

早 崎 源 基

岐阜市民病院産婦人科

新しいピリドンカルボン酸系抗菌剤である T-3262 の産婦人科領域での有用性を検索する目的で、本剤の臨床的検討を行った。

40 歳の子宮内膜炎の症例および 45 歳のバルトリン腺炎の症例に、それぞれ 1 回 150 mg を 1 日 3 回 7 日間投与した。

いずれの症例も投与開始数日以内に症状、所見は消失し、いずれも有効例であった。また本剤投与によると思われる副作用、臨床検査値の異常は認めなかった。

この検討では症例数が少なかったが、産婦人科領域では、内性器感染、外性器感染ともに本剤は有用な薬剤となりうると思われた。

**Key words:** T-3262, 子宮内膜炎, バルトリン腺炎, 臨床効果

T-3262 は富山化学工業株式会社に開発された新しいピリドンカルボン酸系抗菌物質であり、その構造を Fig. 1 に示す。この薬剤はグラム陽性菌をはじめグラム陰性菌、嫌気性菌に対し広範囲な抗菌スペクトルを有し、強い抗菌力を示す。特に *Staphylococcus aureus*, *Streptococcus*, *Enterococcus* などのグラム陽性菌、ブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌、*Peptostreptococcus*, *Bacteroides fragilis* に対し、従来のピリドンカルボン酸系抗菌剤より強い抗菌力を示す、という特長を有する<sup>1)</sup>。

私たちは以前にも同系薬剤の検討を行ってきたが、今回 T-3262 の産婦人科領域での有用性を検索する目的で本剤の臨床的検討を行ったので報告する。

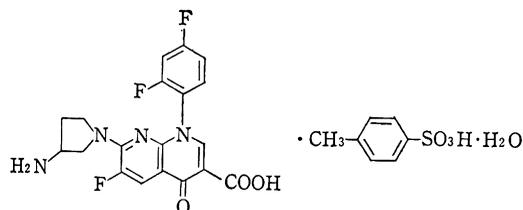


Fig. 1. Chemical structure of T-3262.

## I. 方 法

## 1. 検討対象

昭和 62 年 1 月から 2 月の間に当科を受診した婦人科感染症患者のうち 2 例を対象とした。1 例は子宮内膜炎であり、1 例はバルトリン腺炎であった。

## 2. T-3262 投与方法

いずれも 1 回 150 mg, 1 日 3 回 7 日間食後経口投与した。

## 3. 効果判定法

臨床経過、臨床検査値および細菌学的検査の結果を総合的に考え、主治医が著効、有効、無効の 3 段階に判定した。

## II. 成 績

## 1. 臨床成績

症例 1 Y. S., 40 歳, 子宮内膜炎 (Fig. 2)

昭和 62 年 2 月 3 日, 分娩筋腫を認め経腔的に結紮切

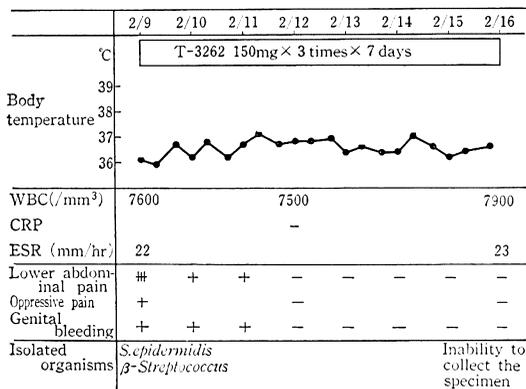


Fig. 2. Case 1, Y. S. (40 y.) Endometritis.

Table 1. Laboratory examination

Case No.	Before or after treatment	RBC (10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup> )	Hb (g/dl)	Ht (%)	WBC (/mm <sup>3</sup> )	Plate (10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup> )	GOT (K.U.)	GPT (K.U.)	Al-P (K.A.U.)	BUN (mg/dl)	S-Cr (mg/dl)
1 Y.S	Before	490	13.9	42.1	7,600	27.4	11	6		12.1	0.9
	After	481	13.9	41.2	7,900	34.3	11	8		10.6	1.0
2 K.M.	Before						14	6	4.7	13.5	0.9
	After	461	14.5	43.3	4,800		12	2	3.7	12.2	0.9

除を行い、感染予防としてセファクロールを3日間投与されていた。

2月8日より下腹部痛および性器出血を訴えて、2月9日入院した。

初診時、子宮体部に圧痛を認めたため、子宮内膜炎と診断し、本剤の投与を開始した。3日後には下腹部痛、性器出血および子宮体部の圧痛ともに消失した。

臨床検査では白血球数が投与前7600から終了時7900、ESR(1h)が22mmから23mmに、CRPが(-)から(-)であった。

細菌学的検査では投与前の子宮内容から *Staphylococcus epidermidis*,  $\beta$ -*Streptococcus* が検出されたが、終了時子宮内容の採取は不能であった。

臨床経過から有効と判定した。

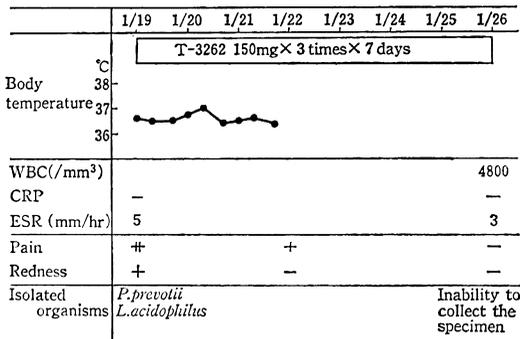


Fig. 3. Case 2, K. M. (45 y.) Bartholinitis.

症例 2 K. M., 45 歳, バルトリン腺炎 (Fig. 3)

昭和 62 年 1 月 16 日ごろより外陰部の疼痛が出現した。症状が徐々に増強するため 1 月 19 日当科を受診した。

初診時、左バルトリン腺部に発赤、圧痛を伴う小指頭大の腫瘤を認め穿刺を行ったが排膿はなく、血性的内容物を少量認めたので、バルトリン腺炎として本剤の投与を開始した。

3日後には圧痛、疼痛は軽度となり、発赤は消失した。7日後にはすべての症状が消失した。

臨床検査では白血球数が投与前不明から 4800 となった。CRP は投与前後いずれも (-) であった。

細菌学的検査では、投与前の内容物から *Peptostreptococcus prevotii*, *Lactobacillus acidophilus* が検出されたが、終了時検体の採取は不能であった。

臨床経過から有効と判定した。

## 2. 副作用

いずれも本剤が原因と考えられる症状・所見および臨床検査値の異常は認めなかった (Table 1)。

## III. 考察

今回の検討では症例数が 2 例と少なかったが、産婦人科領域での内生殖器感染症、外生殖器感染症ともに有効であったことから、本剤は有用な薬剤となりうると思われた。

## 文 献

- 1) 第 34 回日本化学療法学会東日本支部総会, 新薬シンポジウム, T-3262, 東京, 1987

## T-3262 IN THE OBSTETRICAL AND GYNECOLOGICAL FIELD

KUNIHICO ITO, KOJI IZUMI, HIROSHI TAKAGI and TERUHIKO TAMAYA

Department of Obstetrics and Gynecology, School of Medicine,  
Gifu University

40 Tsukasa-machi, Gifu-shi 500, Japan

MOTOKI HAYASAKI

Department of Obstetrics and Gynecology, Gifu City Hospital

We performed a clinical study on T-3262, a new pyridone-carboxylic acid derivative, to evaluate its usefulness in obstetrics and gynecology.

T-3262 was administered to 2 patients suffering from endometritis and bartholinitis at a dose of 150 mg three times a day for 7 days.

The clinical effect was good in both cases, and neither side effects nor abnormal laboratory findings due to T-3262 were observed.

T-3262 was considered to be a useful antibacterial agent in internal and external genital infections.